

第241回愛知学院大学モーニングセミナー

「豊臣秀長と藤堂高虎」

三重大学名誉教授・教育学部特任教授

藤田 達生



2026年4月14日

はじめに

◎豊臣秀長には、兄秀吉の欠点をサポートした温厚な武将というイメージがある。天才を支えた苦労人という人物像である。これは、かつてNHK大河ドラマ『秀吉』（1996年）や その原作となった堺屋太一『豊臣秀長 ある補佐役の生涯』（PHP研究所、1985年）を通じて広く浸透したように思われるが、秀長が生きた時代のものではない。

◎秀長像の淵源は、藤堂藩（高虎を藩祖とする伊賀一国と中部伊勢などからなる32万石の外様藩、藩庁は伊勢津、津藩とも）の藩史『^{いつしゅうろく}聿脩録』

（10代藩主藤堂^{たかさわ}高允撰、文政12年〔1829〕）→「人となり温恭にして長者の風あり、関白（秀吉）、法を用うる事過嚴なり、いらい毎に寛仁をもつてこれを救い、諸侯倚頼す（頼みとした）」（天正19年正月条）という部分が、それに該当。

◎藤堂高虎は、秀長の死後、徳川家康・秀忠の側近となった後も終生旧主を弔い続け、大和豊臣家に連なる人脈を大切にし、家臣団にも関係者が少なくなかった →秀長像も、そのような人脈を抱え受け継ぐ藤堂藩の藩史らしい。

表1 藤堂高虎略年譜(誕生から文禄4年まで)

年	西暦	齢	事 績
弘治2	1556	1	1月6日、近江国犬上郡藤堂村に誕生(4月20日説あり)
永禄12	1569	14	8月29日、兄高則、伊勢大河内城で多賀良政とともに討死
元亀1	1570	15	6月28日、姉川の戦いに浅井軍として参加(初陣)
2	1571	16	同輩を斬って浅井家を出奔し、阿閉義秀(政秀)に属す
天正1	1573	18	阿閉家を出奔し、磯野員昌に属す
2	1574	19	磯野員昌の跡を継いだ養嗣子織田信澄に属す
4	1576	21	冬、木下(のち羽柴・豊臣)秀長に属す
9	1581	26	秀長に従い、但馬一揆鎮圧 この年、久芳院と結婚(正室)
対 12	1584	29	10月、秀長の紀伊・和泉移封に従う
象 13	1585	30	3月、根来・雑賀一揆鎮圧 紀伊国衆の一揆鎮圧 5月、四国出兵に従い、阿波国木津・一宮城を攻める 8月、再び紀州一揆を鎮圧する
14	1586	31	10~11月頃 家康と初めて会う
時 15	1587	32	3月、九州出兵に従い出陣する 9月、丹羽長秀の三男仙丸を養子とする(後の高吉) この年、従五位下佐渡守に任官し、近衛家を宗家とする
期 18	1590	35	3月、小田原出兵に従い、伊豆韮山城を攻める
19	1591	36	1月、秀長死去 養嗣子秀保を補佐する
文禄1	1592	37	7月、文禄の役に従い、朝鮮へとかいする
4	1595	40	4月16日、秀保死去、高野山へ隠遁する 6月秀吉の再三の説得により、高野山を下山 7月22日、伊予宇和島7万石に封ぜられる

1. おいたち

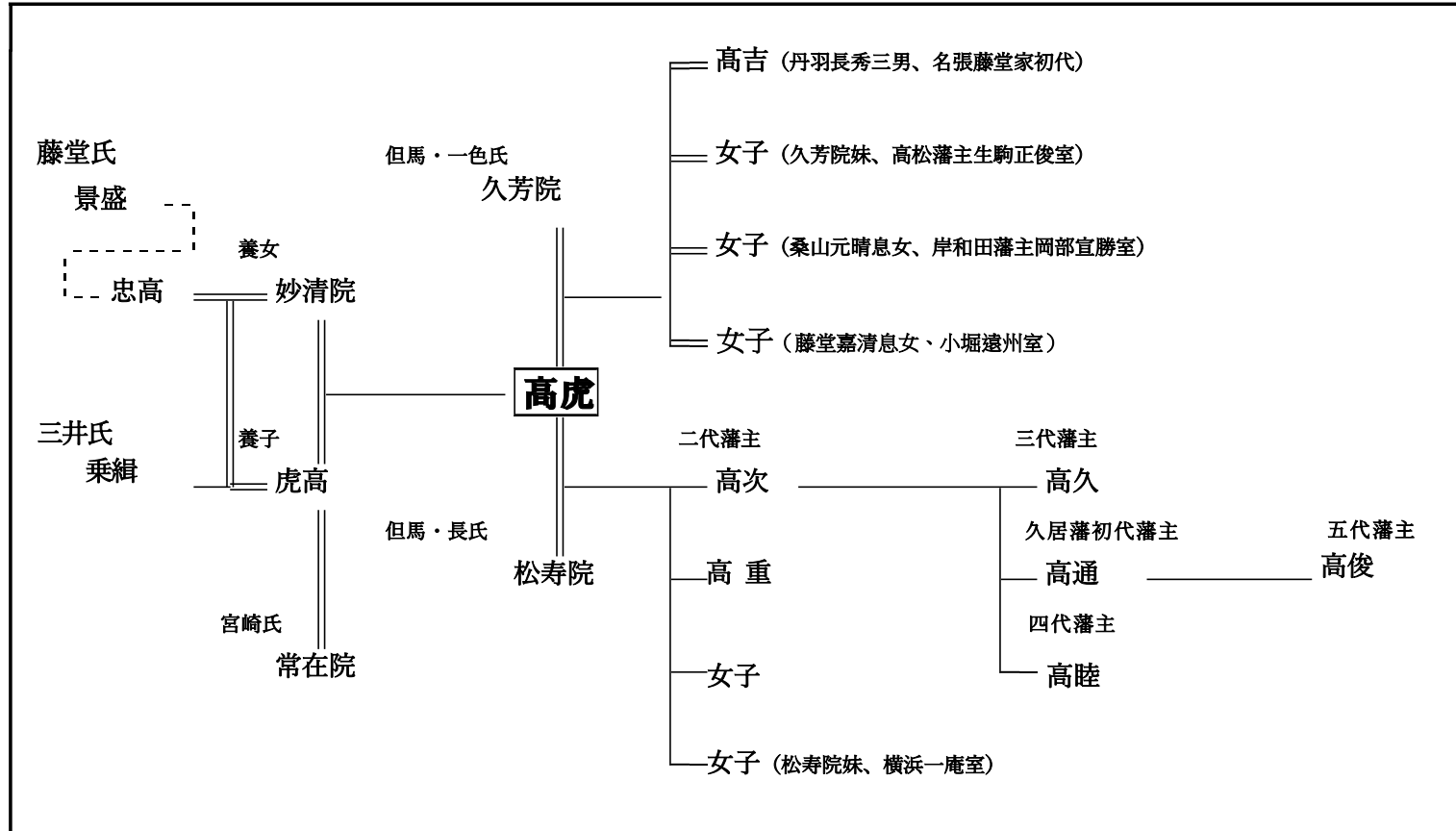


図1 藤堂高虎関係略系図

2. 「渡り奉公」時代→表1

・『高山公実録』の永禄11年の14歳の時のエピソード→小谷城下で盗賊を退治する。

・成人後高虎は、6尺2寸(約188センチメートル)もの長身で、体重も百キロを超えていた→戦国 武将を代表する大男→画像は二種類伝存するが、寿像の系譜を引くのが藤堂宗家・四天王寺・

三重県立図書館・観音寺所蔵→「面柔和ニシテ色赤ク鼻高ク耳ハ勝レテ大キ」
『公室年譜略』) に合致する。

3. 豊臣秀長に仕える

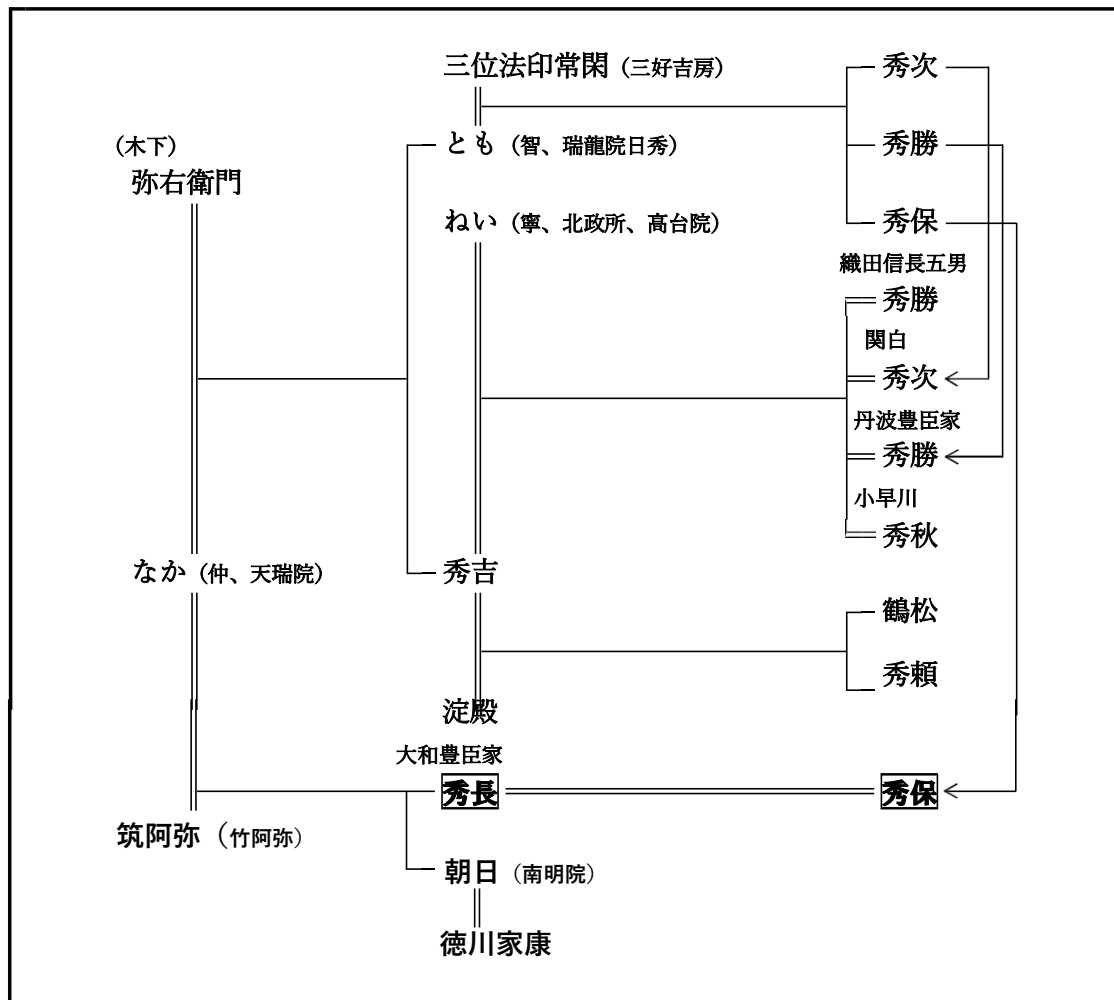


図 2 豊臣秀吉関係略系図

・ 牢人高虎は、秀吉の実弟羽柴秀長からのアプローチを受けて仕官→天正4年冬21歳の時のことで300石を与えられたという→18世紀以降に編纂された『宗国史』をはじめとする藩正史は、一様に天正4年仕官説→17世紀末に成立したとみられる『藤家忠勤録』のみは天正8年のこととして、播磨別所氏攻撃に参陣したとする→このあたりが史実か。

秀長は但馬の平定を任され、天正5年には竹田城（兵庫県朝来市）をはじめとする同国南部の諸城を拠点とする。それらを基地として北部山岳地域から侵入する小代一揆を鎮圧し、天正8年にはほぼ但馬八郡を掌握したが、高虎はその先鋒を任された→兵庫県香美町では、町内の 竜泉寺・天福寺・大運寺に高虎の軍勢によって焼かれたという伝承→一揆鎮圧の功によって高 虎は3000石を加増され3300石取りの大身武士となった→但馬時代からようやく史実の片鱗が見えてくる。

・ 大屋（兵庫県養父市）の栃尾氏の協力のもと加保城を本拠とする。天正9年に26歳となった 高虎は、当地の有力者で室町幕府の四職家の流れをくむ名門一色氏の息女（久芳院）と結婚→故郷の両親を招き寄せて同居→夫人の一族には、家康の政治顧問となって活躍した以心崇伝がおり、やがて高虎と親密な関係を築くことになる。

・ 一家は天正15年に紀伊粉河（和歌山県紀の川市）に移るまで栃尾氏の庇護を受けたという。

居相孫作（政貞、養父郡田和城主政熙の子息）をはじめとする但馬衆を家臣団として編成する ようになる→但馬時代は、高虎が後に大名家としての「藤堂家」を形成する起点。

4. 秀長の家老になる

〔順調な出世〕

- ・高虎は、天正13年の和泉・紀伊攻撃に出陣した。和泉の千石堀城や積善寺城などの近木川筋の城郭（いずれも大阪府貝塚市）を落とし、紀伊の根来寺（和歌山県岩出市）を焼き討ちし、太田城（和歌山市）を水攻めし、さらに奥郡の玉木・湯川・山本などの有力国人を攻撃した→高虎は自らの家臣団を率いて秀長の先鋒を務めたという。

- ・同年6月から7月にかけての四国攻撃においては、秀長が総大将に羽柴秀次が副将となった。

阿波一宮城（徳島市）攻撃の折に、高虎が夜間に敵城視察をおこない、鉄炮にあたり大怪我をしたことが伝わる→その後は同城の開城と長宗我部氏との講和交渉に関与し、元親を降伏させることに功があった→天正13年10月に元親が秀吉に臣下の礼を取りに大坂に来た時には取次役を務めている→これ以来、藤堂・長宗我部両家は良好な関係を築く→大坂夏の陣の悲劇。

- ・秀長は、和泉・紀伊攻撃の後には両国を、四国攻撃後はさらに大和も加増され三ヶ国の太守に→大和郡山城を本拠とする「大和豊臣家」を興す→秀吉は摂津・山城を中心所領にしていたが、その南で100万石ともいわれる大所領を与えられて直接政権をバックアップする。

- ・天正13年の和泉・紀州と四国への攻撃の際の活躍に対して、秀長が5400石を預けた→大和豊臣家の家老として確固たる地歩を築く。「藤堂家覚書」には、豊臣秀長が大和と伊賀（紀伊力）を拝領したときに5000石加増され1万石となったと記す→材木の管理や伐り出しと一揆鎮圧を担当。

〔人脈形成〕

- ・近衛信尋との関係は、天正15年に高虎が従五位下佐渡守に任官して藤原氏支流を称し、近衛家を本宗家と仰ぐようになったことに始まる→後に高虎は將軍家と朝廷との融和策を主張し、元和6年（1620）に実現する徳川秀忠息女和子の後水尾天皇の中宮としての入内を取り計らうが、それは後水尾天皇の実弟で近衛家を継いだ近衛信尋と、長年にわたって親密な関係を築いていたからこそ実現。
- ・高虎と家康との関係→天正14年に京都では秀吉が関白邸聚楽第を造営し、その周りに大名屋敷が立ち並ぶ→同年10月に上洛し臣従した家康に対して、秀吉は秀長に命じて屋敷をつくらせる→高虎は、天正14年に推定される10月8日付高虎宛家康書状（『高山公実録』）で、「屋敷普請（怡）の儀に付きて精を入れられ候由、真にもって為悦このことに候」と感謝されている→特にその台所門は、高虎が私財をつぎ込んでまで普請したという（「藤堂家覚書」）。
- ・秀長は妹朝日の夫＝義弟となった家康と昵懇→天正14年10月に家康が上洛するにあたって秀長は歓待したのを皮切りに、天正16年には家康が苦慮していた三河真宗寺院との紛争を秀長が仲裁したり、やがて秀長が病床に伏すと家康は何度も見舞った。
- ・正室久芳院を介した遠縁にあたる一色氏出身の以心（金地院）崇伝は幕府政治、本宗家の近衛信尋は朝廷関係、女婿小堀遠州は公儀作事→高虎は彼らとの関係を活用しつつ家康側近として行動。

- ・ 法隆寺の工匠であった中井家と親しく、後年には徳川將軍家の「大工頭」となる中井正清とも一緒に築城を担当→正清は建築界に君臨し、大工集団を率いて江戸城をはじめとする徳川方 城郭の作事にいそしみ、その弟子筋は諸国の城郭作事に派遣。

- ・ 秀長人脈が豊臣時代のみならず江戸時代の建築界を支配→理由は、京都にあった伝統建築が応仁・文明の乱によって灰燼に帰したが、奈良には法隆寺や興福寺などの第一級の古建築が残 っていた→この時代の建築技術は、秀長が支配する奈良の大工衆が独占。

- ・ 秀長時代の高虎の築城においては、石垣普請は近江穴太衆が、作事は大和大工衆の中井家が担当→後に小堀遠州が育ち、近江大工衆の甲良家が加わる→天正19年の秀長死去後の高虎は、 上方で築かれた秀長人脈を家康に橋渡→図3の主君秀長の位置を家康が占める。

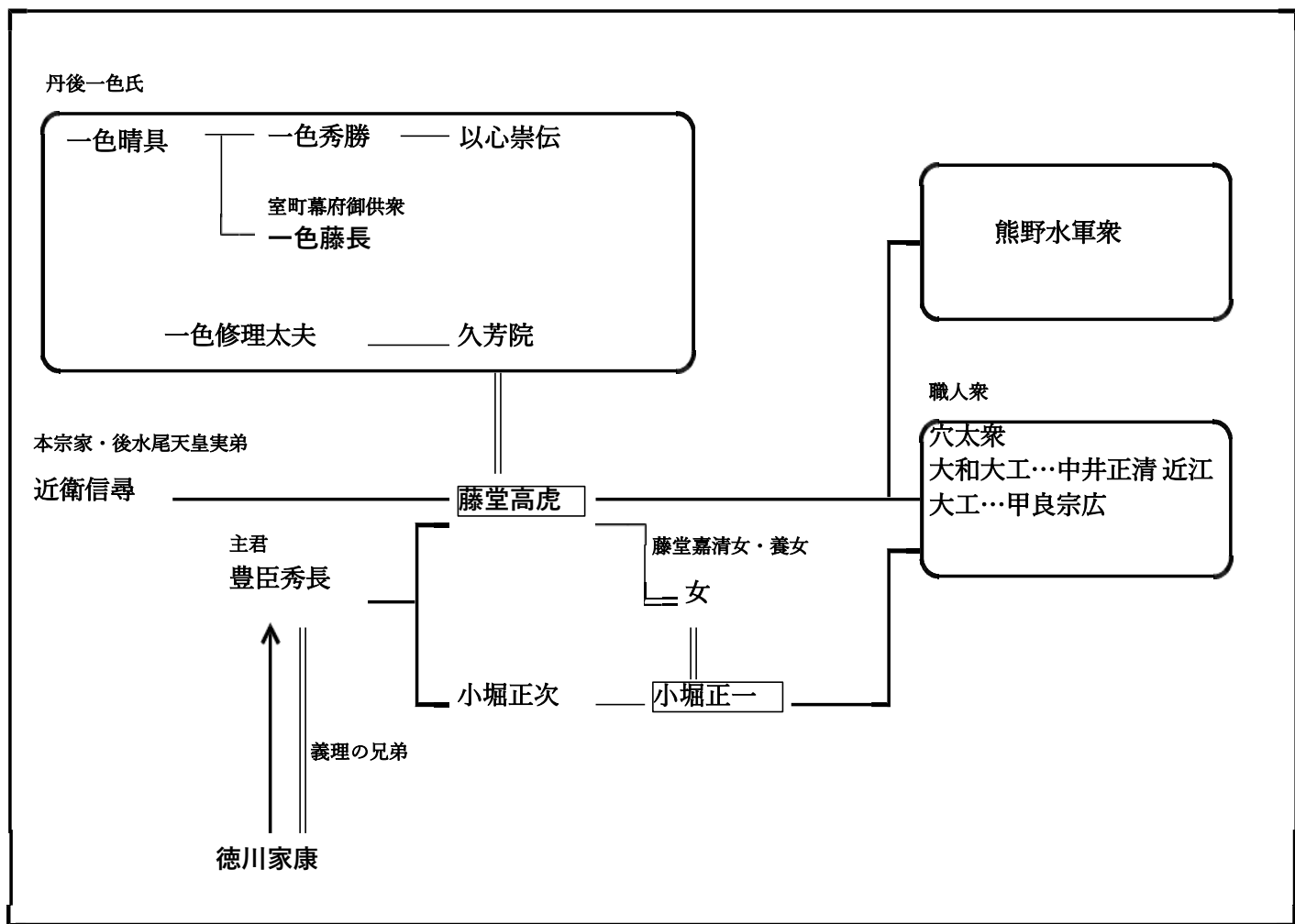


図4 大和豊臣家の家老時代に高虎を支えた人脈

5. 秀吉に支えられた大和豊臣家

・大和時代の秀長家臣団は、「与力・大名・小名」（『多聞院日記』）という構成。与力…新宮の堀内氏や和佐（和歌山県日高川町）の玉置氏ら紀伊国の在地勢力や、秀吉から付けられた有力武士であり、大名・小名とは秀長の直臣で預けられた石高の大小による。横浜一庵（良慶）・小堀正次・井上源吾を家老、藤堂高虎・杉若無心・羽田正親を与力とみる研究もある→戦時において前者は留守居役を務め、後者は従軍した場合によっては秀吉の直属軍となることもあったが、まさに高虎がその代表格

・天正十一年四月の賤ヶ岳の戦いで高虎は、柴田勝家の本陣・近江玄蕃尾城（福井県敦賀市・滋賀県長浜市）攻撃に功をあげ、秀吉から千石、秀長から三百石を与えられ、都合四千六百石となった（「藤家忠勤録」）。また天正十五年の九州攻撃の際に発令された長崎の収公命令について、秀吉直臣の寺沢広高とともに担当している。

・山奉行として東山大仏殿の建設に関与したのも、秀吉の国家戦略からのもの。

・山奉行として高虎と同僚だった羽田正親も、従五位下長門守の官職を得て、大和宇田松山城（奈良県宇陀市）で四万八千石を領した。彼らは、所領石高は万石クラスで、従五位下の官職を得て城郭を預けられていた。

・ これらをふまえると、与力とは大名が国替しても動かない堀内氏のような有力在地勢力、秀吉から秀長に付けられた武将、そして高虎のような秀吉の命令を受け領地も給与されている実力者をさし、秀吉・秀忠に対して両属的な活躍を求められたし、秀長死後彼らの多くは豊臣大名となっている。これに対して大名・小名とは、横浜一庵や小堀正次らの秀長直臣 をさすとみることができよう。

・ 秀長は、紀伊国では和歌山に桑山重晴（二万石）、紀伊湊に吉川平助（七千石、材木不正発 覚により天正十六年十二月に処刑）、粉河に高虎、田辺（田辺上野山城）に杉若無心、新宮に堀内氏善（二万三千石）と、拠点城郭に与力・大名クラスを配置。

・ 大和国でも同様で、郡山に筆頭家老の横浜一庵（五万石）、宇陀松山に羽田正親、高取に本 多利久（二万五千石）などが配置。これに福智長通、多賀秀種らの側近が加わる。彼らは、天 正十五年以降に大和豊臣家の諸大夫として組織されていた。

・ これらをふまえれば、秀長の領国支配は秀吉領国の一部を預かっておこなったような特殊性を感じる→当初は和泉一国も領国に入っていたが、小出秀政らが同国に所領を得たため替地を伊賀で与えられたり、先述したように高虎ら重臣になかに秀吉から直接動員を受けたりする者がいたり、あくまでも秀吉の差配が先にあって、独立した領地支配ができていないという印象すらもつ。

・ 秀長が長らく病弱だったことによるものか（天正十四年頃から関係史料が散見する）、秀吉の意向なのかは現時点では判断がむずかしく、課題と言うほかない→確認できる範囲 ではあるが大和豊臣家の重臣団の構造をまとめた表を掲げたい。

表2 大和豊臣家重臣団〔家臣名（城郭・石高・備考）〕

与力（秀吉・秀長両属）
羽田正親（大和小泉→大和宇陀松山、4万8千石）、藤堂高虎（紀伊粉河、2万石、山奉行、副状作成、後に豊臣大名）、吉川平助（紀伊湊、7千石、山奉行、天正16年12月に処刑）、杉若無心（紀伊田辺上野山、後に豊臣大名）、多賀秀種（大和宇陀松山）、堀内氏善（紀伊新宮、2万3千石、後に豊臣大名）
大名・小名
横浜一庵（家老、5万石、副状作成）、小堀正次（家老、5千石）、本多利久・俊政（大和高取、2万5千石、後に豊臣大名）、福智長通（側近）、尾藤頼忠（側近、後に豊臣大名）、足田就長（側近、副状作成）

「輝元公上洛日記」（天正十六年七月、毛利輝元が上洛のため安芸吉田郡山城を出発し、同年九月帰城するまでを家臣平佐就言が書留めた旅行記）には秀長の家臣として加藤光泰、池田秀雄、小川祐忠の名がみえる。

- ・加藤氏は、秀吉の不興を買って一時的に秀長のもとに預けられていたが、復権して近江佐和 山城主（二万石）となっている。

- ・池田氏と小川氏は、ともに近江国甲賀郡出身で、天正十一年の山崎の戦いで明智光秀方に与した後に秀吉に仕え、秀長に属する（与力だろう）時期があった。後のことではあるが、関ヶ原の戦いの直前に、西軍についた彼らに高虎が寝返るよう口説いたのも、互いに近江人であり、かつ秀長旧臣という縁によるものであろう。

むすび

- ・藤堂虎高の次男として誕生し、渡り奉公の末に豊臣秀長・秀保の重臣として従五位下、2万石、紀伊粉川城主という大名並みの地位まで出世。

- ・秀長の重臣として、近衛家ばかりか家康をはじめ有力大工衆中井家・甲良家との関係を築く→秀吉の命も受けて活躍し、秀保死後は豊臣大名へ→秀吉・秀長兄弟が育てた側面。

〔参考文献〕

深谷克己『津藩』（吉川弘文館、2002年）

斎藤隼人「藤堂高虎の人脈ネットワーク」（藤田達生監修・三重大学歴史研究会編『藤堂藩の研究』清文堂、2009年）

榎原雅治「「藤堂家始祖『三河守景盛』の素顔」（『歴史書通信』196 2011年）

佐伯 朗『増補 藤堂高虎家臣辞典』（私家版、2013年、1994年刊行本の増補版） 清水俊之
「戦国期丹後一色氏の基礎的研究」（『戦国史研究』82、2021年）

伊藤裕偉『聖地熊野の舞台裏』（高志書院、2011年）・「豊臣政権による熊野北山制圧の検証」
（『織豊期研究』25、2023年）

柴裕之編『豊臣秀長』戎光祥出版、2024年

河内将芳『図説豊臣秀長』戎光祥出版、2025年

伊藤裕偉「東山大仏殿造営にかかる熊野木材の調達と搬送」三重大学歴史研究会『ふびと』75、
2025年

拙著『江戸時代の設計者 異能の武将・藤堂高虎』（講談社現代新書、2006年）・『天下統一論』
（塙書房、2014年）・『藤堂高虎論—初期藩政史の研究』（塙書房、2018年）・『藩と何か』（中
公新書、2019年）・『藤堂高虎』（ミネルヴァ書房、2026年正月刊行予定）

基本史料

『宗国史』（上・下、上野市古文 献刊行会編、同朋社出版、1979・1980年）

『公室年譜略』（全二巻、上野市古文献刊行会編、清文堂出版、2003年）

『高山公実録』（全二巻、上野市古文献刊行会編、清文堂出版、1998年）

「藤家忠勤録」（三重大学附属図書館所蔵）

『三重県史 近世編 資料1』

『藤堂高虎関係資料集 補遺』（三重県史資料叢書5）